2023 年 8 月 20 日仙川教会説教

「つながりの中に招く羊飼い」　　ルカによる福音書　15 章 1 － 7 節
イザヤ書　40 章 11 節

日本基督教団荻窪教会牧師　龍口奈里子

聖書の中で「羊」ほど多く登場する動物はいないと思います（詩編 23 篇など）。しかし子どもまで知っているといえば、100 匹の羊のたとえではないかと思います。

100 匹の羊のうち 1 匹がいなくなり、羊飼いは 99 匹を野原に残して、探しに出ました・・・有名な「見失った羊のたとえ」です。並行記事のマタイによる福音書 18 章 12 節以下では、小見出しが「迷い出た羊のたとえ」とあります。2 つは一見同じたとえとして読まれていますが、でもどうして小見出しが異なっているのでしょうか。この両者の違いを見ることによって、二つのたとえの中心点がわかってきます。

両者とも 1 匹の羊が残りの９９匹の羊の群れから外れてしまったという状況は同じです。でもその 1 匹が、ルカでは「見失った羊」とあり、マタイでは「迷い出た羊」とあるのはどうしてなのか、考えてみたことがあるでしょうか。

マタイの「迷い出た羊」という場合は、どちらかと言えば、1 匹の羊が自分から群れから外れて、自ら迷子になってしまったと読めます。つまり迷子になったのは、1 匹の羊の方に理由がある、厳しく言えば、責任があるということでしょう。それに対いてもう一方のルカの方は「見失った羊」とあります。つまり見失ってしまった羊飼いの方に原因がある、責任があると強調しているようです。

もう一つ異なっているのは、マタイは、迷子の 1 匹の羊を「羊飼いが」探しに行くとき「99 匹を山に残して」とあるのに対して、ルカは「99 匹を野原に残して」とあります。「山」と「野原」。聖書では「山」はエルサレムを指します。すなわちエルサレム神殿のある所です。神殿の中は、救いのある所でもあります。100 匹がつながれている場所はいわば「聖域」であり、この中にいれば安全・安心な場所だということです。

ではルカはどうでしょうか。ルカは「99 匹を野原に残して」とあります。「野原」とは、ギリシャ語で「エレーモス」といい、日本語に訳すと「人里離れた場所、寂しいところ」という意味です。マタイの「山」＝聖域に対して、ルカの「野原」は寂しく、人里離れた場所で、決して安心・安全ではない所という意味になります。

マタイとルカでこのように異なっているのは、マタイの方は教会的な視点をもって書いているからでしょう。マタイの言う１００匹の羊のいる場所は「聖なる場所」＝「教会」を指します。「自ら迷い出てしまった 1 匹の羊」とは、教会から迷い出てしまった人、信仰生活から離れてしまった人を指し、彼らを探し求めようとする、「羊飼い」としての教会の働きの大切さをマタイは語っています。教会という聖なる場所の中にこそ救いがある、だから、そこから離れてしまった人々をまた教会の中につなごうとするマタイの教会中心的な考え

方が強調されていると思います。

ではルカはどうでしょうか。ルカはマタイのように、100 匹のいる場所を聖なる場所とはしていません。安心・安全な場所であるとも限定していません。あくまでも「野原」なのです。「教会」という場所に限定しないで、ルカは大きく「社会」の中での「羊飼い」と「羊たち」との関係をたとえで語ろうとしているのです。ですから、そこに 100 匹の羊が集まっているということは、１００匹分の様々な羊がいるわけです。たとえば、当時の徴税人や罪人と呼ばれる人たち、異邦人たち、女性たち、子供たち、そんな人々も含めた１００匹の羊です。ただしかし、１００匹集まると、必ずや、多数と少数に分かれてしまい、囲いから排除されてしまう人たちがいます。その時、ルカのたとえの中の「羊飼い」は９９匹の方ではなく、少数の方、そのたった１匹の「見失った」羊の存在に目を注ぎ、見つけるまで探し出すのだと語っています。それが羊飼いなる主イエスの存在なのだと伝えようとするのです。

今の言葉でいうなら「誰一人取り残さない」というキャッチコピーになるのかもしれません。ご存じでしょうか。このタイトルは持続的な開発目標（SDGs）のキャッチコピーです。国際社会が２０３０年までに目指す１７の目標に共通する個々の理念を掲げて、「誰一人取り残さない」という理念を達成するために、少数者やマイノリティに配慮することが日本社会でも求められています。少数者の中には、障がい者、LGBTQ、外国人などが含まれますが、現実はどうでしょうか。少し前の大きなニュースで、名古屋の出入国在留管理局で死亡したウイッシュマ・サンダマリさんをめぐっての、ある国会議員がとんでもない発言をしたことが取り上げられていました。「病気になれば仮釈放してもらえる」という淡い期待を抱かせ、医師から詐欺の病気の可能性を指摘される状況へつながった恐れも否定できない、と発言したり「ハンガーストライキによる体調不良で亡くなったかもしれない」とも発言したのでした。まるでウイシュマさんが亡くなったのは、うその病気をついたからだ、自己責任であるかのように言い放ったのでした。これはもう亡くなってもさらにウイシュマさんの人権を侵してしまう発言です。そしてこれが私たちの社会の現状でもあります。「誰一人取り残さない」どころか、私たちの社会はまだまだ声の大きい、あるいは自分は自立している、健康であると自負する社会、それが９９匹の羊たちならば、当然、そこから排除されてしまう１匹の羊が必ずいるのだということです。その１匹の羊とは、ルカのたとえを読むとき、決して自らの責任で囲いから出て行くのではなくて、多数から除外されるようにして、はじき出されしまった１匹の羊なのだということがわかります。

それは、主イエスが食事を一緒にされた徴税人や罪人と呼ばれる人たちであり、「この人たちが神の国に一番近い」と言われた子供たちなのでした。

実はルカとマタイのたとえでもう一つ異なる点があります。「羊飼い」が１匹の羊を探し出した後の行動です。マタイの「羊飼い」は、ただ１匹の羊の帰還を喜びとしているだけなのに対して、ルカの方は、「見失った羊」のたとえに続いて「無くした銀貨」のたとえ、そして「放蕩息子」のたとえと続きます。この３つのたとえに共通するのは、一匹の羊、１枚

の銀貨、一人の放蕩息子と、そのたった「1 匹、 1 枚、1 人」が、自分のもとに帰って来た時、羊飼いも銀貨の持ち主も放蕩息子の父も、近所の人たちを呼んで喜びの席を準備し、その場所に、見失った羊と銀貨と弟を招き入れるところで終わっています。迷いでたものを探し出そうとする神の姿、神様から離れたと思い込んでいる人たちを神の祝宴につなげようとする主イエスの愛の姿をルカは見事に描いているのです。

さらにルカは、「羊飼い」が「1 匹の羊を家に招き入れる」とき、自らが羊を担いで家に入ってゆくのでした。探し出せたときの羊飼いの喜びと探し出してもらった 1 匹の羊の喜びが二重になって伝わってくる場面です。

私たち一人一人もまた、主イエスに探し出されて、かつがれて、喜びの席へと、主イエスの体なる教会の中へとつながれ、招かれた者なのだということでしょう。

「見失った 1 匹の羊」を見つけだして、そのつながりの中へ招いてくださる羊飼いなる主イエスと共にいます。多数の場所に戻されるから安心するのではありません。たとえ一人でも、主なる神は「誰一人取り残さない」方であり、見つけ出すまで探し続けてくださる、そして共に喜んでくださる方なのです。私たちも、たったひとりの存在に目を向け、主イエスに倣って、交わりの中につなげていく存在でありたいと願います。教会がそのような場所でありたいと願います。